慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済的自給主義思想史概観
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1941
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.35, No.9 (1941. 9) ,p.1067(1)- 1115(49)
JaLC DOI	10.14991/001.19410901-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19410901-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大學
經濟學部教授
寺尾琢磨譯

マルサス人口論

（第六版完譯）

規格A5判・總八六八頁
布裝擬革背・天染・函入
定價九圓・送料三〇錢

マルサスを乘越えて
新人口政策の樹立へ

高度國防國家に於ける一國人口の多少は、直ちに綜合的國力の强弱に響く。國內的には人口資源問題として、對外的には民族發展問題として、人口政策の威力の痛感せらるゝ秋、人口論第六版の完譯成る。

由來、經濟古典中、本書の如く誤解の渦中に投ぜられたるものは二とない。しかし、修正さるべきは、彼の政策的結論にして、打樹てられたる人口原則そのものは今にその光芒を放つ。玆に改稿數年、一字一句をも苟くせざる本決定版を贈る。マルサスを乘越えて新しき人口政策を確立し、益々强力にして龜裂なき民億萬の結成に資せんがために。

東京市芝區三田二ノ一
慶應出版社
電話三田(45)二七九一
振替東京一五八一八〇

三田學會雜誌　第三十五卷　第九號

經濟的自給主義思想史概觀

高橋誠一郎

一

現代に於ける經濟的自給主義は、國家主義を中心とするものであるが、而も、廣義に於ける經濟的自給主義は、近世國家に先行し、極めて邈乎たる過去に遡るものである。總じて自給自足は原始社會の特性であつたと稱することが出來よう。

吾人は、他の機會に於いて、古代希臘に於けるホメーロス時代の氏族若しくは家族が、初めは廣大なる集團であつて、同一の神雄を共同の祖先として有することを主張する總べての者は、同一の爐邊に結合するの風を維持して居つたことを述べた。家族團體は、其の自治權を維持し、自己の首長と、自己の禮拜と、自己の行政と　自己の司

法とを有して居つた。而して、吾人は又、斯くの如き政治的獨立が唯り經濟的獨立を俟つて初めて可能なるものであることを說いた。家民を共にし、食卓を同じうする者は、不可讓不可分なる共同世襲財產を保持して居つた。共有財產に衣食する者は總べて共同の仕事を助成するの義務を嚴守しなければならぬ。之れを拒む者は、共同體によつて呪逐せられた。而も、軈がて、家族が共同體として立ち、家族各員相互の援助が、あらゆる個人の所要を殆んど完全に滿足させることの出來た時代は過ぎて、社會的及び經濟的全一は解離し、家族共同體は、最早一切の利益を包含することを得ざるに至り、經濟的交易が次第に其の重要の程度を增加するに連れて、先きには單に種族及び家族の政治的聯合に過ぎなかつた「市」（ポリス）は、爰に、總べての者が相會して、互に其の欲望を滿足せしめ得可き中心を有することゝ爲つたのである。（『三田學會雜誌』第二十七卷第九號所載拙稿『ペリクレースの大工事に就きて の社會經濟史的考察』二—四頁）。是に於いて乎、國家（ポリス）を以つて事物究竟の標的たる正義の理想の表明たらしめんとしながらも、而も、先づ其の結束力を人間の欲望に於いて看出さんとするプラトーンの國家觀は發生する。即ち、彼れに從へば、吾人は個々別々では自足的ではなく、而も、悉く皆、多樣の欲望を有するものなるが故に、國家は人間相互の必要から生ずるのである。（昭和四年版拙著『經濟學前史』一五四—五頁）。

斯くて、總べての生活必需品の供給を自己の所有地より取得する自足的家族の理想は解けて、總べての物を有し何物をも缺くことのない領土を有し、外國貿易に依賴するの要なき自足的國家の理想は生じた。然しながら、實際に於いて、雅典の如きは、早く穀物の不足を感じ、之れを輸入に仰ぐと共に、葡萄酒及び橄欖油の輸出を以つて之れに支拂ふの必要を來し、玆に國際的分勞を生じ、夷狄（バルバロイ）と正規的通商を行ふに至つた。ソローンは工業と海外貿易とを奬勵し、之れに便宜なる新貨を與へ、農民をして小麥耕作より橄欖栽培に向はしめ、又、橄欖油以外の田園產物の輸出を禁止した。而して、橄欖油の輸出增加に連れて、其の容器たる陶器の生產も亦、增加するに至つた。外國貿易の發達が人口の增加と富の蓄積とを刺戟し、穀物耕作が愈々衰微すると共に、雅典は、一方に於いては、ポントス、スラキア、スュリア、埃及、リブュア及びシキリア等の各地方よりの穀物船の航路を防護すると共に、他方に於いては、自國の消費に取つて必要なる穀物の供給を確保するが爲めに强制的法制を制定しなければならなかつた。（前揭拙稿二四—二九頁參照）。斯くして、國家的自給自足を維持せんとする希望と、外國貿易に基ける經濟的國際主義に向つて進まんとする趨勢との交互作用は、明確に希臘史上に現るゝ所であつて、又希臘哲學者の經濟思想に影響する所の大なるものであつた。

プラトーンは、其の『國家篇』に於いては、輸入品を要することのない地域に、都市的國家を建設することは殆んど不可能なるが故に、他の諸邦より自國に所要の貨物を輸入する商人を必要とすることを認め、而して輸入を行ふ者は、對手國の要求する貨物を携へることなく、空手を以つて出發することを得ざるが故に、自國市民は、啻だに國內の消費に足るだけを生產するに止らず、彼れ等が其の勤務を必要とする人々の要求する物品の一定量をも亦、生產しなければならぬと說いた。（Rep., 370E-371 A.）。然るに、アリストテレースに至つては、國家的自給自足の利益は萬人之れを認むるに於いて一致する所であると做してゐる。即ち曰く、「一國が如何なる領土を有す可きで

あるかに關しては、何人も自給自足の程度最も大なるものを稱揚す可きことが明かである。自給自足的なるが爲めには、這般の領土は必然其の住民に總べての生活必需品を供給するものでなければならぬ、蓋し、總べての物を有して、何物をも缺くことのないのが滿足であるからである」と。而して又、彼れは、其の廣袤に關しては、其の住民が自由と節度とを有して有閑の生活を送ることが出來る程度のものでなければならぬと做してゐる。(Pol., 1326 B.)。

然しながら、實際政治家の見地は往々にして狹小なる都市的國家の界域を越えて遠く進んだ。ペリクレースは曰く、「我れ等の都市の偉大は、陸續として全世界の產物を吸引する」と。雅典を中心として世界的市場を建設せんとする雄大なる夢想は殆んど現實化せられた。而して、同國が政治的覇權を喪失せる時に於いてすら、其の商業上の至上權は、失はれることがなかつた。雅典人が市場の支配者たる地位を維持することを得たのは、固より種々なる事情に依るものではあるが、就中、最も力の有つたものは、彼れ等の艦隊が猶ほ世界最優秀のものであつた一事である。

一國が海外よりの供給に依存するに至ると共に、倫理的標準は變化した。蓋し、海上の覇權と海外の領土的膨脹とは今や其の安固に取つて必要缺く可からざるものと爲つたが爲めである。アレクサンドロスの理念は都市的自治から希臘的統一に向つて進み、更らに希臘的統一から世界的帝國の建設に向つて進んだ。民主主義的小國家の社會倫理的批評家たるの域を脫することの出來なかつたアリストテレースは、終に其の弟子アレクサンドロスを指導することが出來なくなつた。アレクサンドロスの登場と共に、希臘人の政治的及び社會的地平線は其の地理的の其れと等しく擴張せられた。彼れの壯圖は、希臘思想家の腦裡に宿つた理想國の構造を一變した。彼れ以前に夢想せられた理想國に在つては、猶ほ階級的支配と奴隸制度とが根柢を成して居つた。然るに、彼れ以後に於いては、多く同胞主義を基礎とし、自由勞働の品位を承認するものと爲つた。然しながら、是れ等理想國の多くは、貨幣なく、交易なく、大地の產物に依存するものであつた。ヅェノーンの『ポリティア』に在つては、總べての人々が、悉く皆、人種若しくは制度の差別なく、單に宇宙に遍滿する普通法に從ひ、又之れと一致し、而して、强制によることなくして、單に自己の心からなる同意、即ち相互的同胞愛によつて結合して一の社會生活を成せる單一國家の成員たる可き世界が、アレクサンドロスの壯圖の靈感を受けて夢想せられた。而して、そは萬人悉く同一の衣服を着し、毫も不自然なる禮節なく、結婚なく、家族なく、神殿なく、法衙なく、貨幣なく、商業なく、體育館なく、又總べての因襲及び傳統的制度なき無何有鄕的なるものであつた。アリストテレースの學徒、メッサナのディカエアルホッスは、其の『希臘の生活』に於いて、人間が自然と一致して生活せる原始的樂園を叙し、這般の黃金時代に在つては、人類は其の食料を動物に仰がずして、果實を以つて活き、而して私有財產の害惡が發達して、人間社會の廢頹を誘起するに至る迄は、憎惡及び鬪爭を激成す可き何物も存しなかつたことを說いた。アレクサンドロスと同時代のプデニの人ヘカタイオスによつて埃及のパロ王國を理想化して描寫せられた『キンメリア』に於いては、あらゆる被征服地は悉く市民の間に平等に分配せられ、而して其の地產は賣却せられることを得ざるものであつて、人間は營利欲、內爭及び之れより結果し來る總べての病患から免れ、而して其の理想とする所は最大なる富の增加ではなく

して、最高の社會的理想を目標とせる市民の發達であつた。マケドニア王カッサンドラの友人エウヘメロスによつて『神聖記錄』（ヒエラ・アナグラフェ）中に錄された僧職的貴族によつて統治せらるゝ印度附近の一島嶼に於ける理想的社會に於いては、階級的社會組織を認めながらも、勞働は著しく尊敬せられ、工匠は僧職的階級に列り、農夫は第二階級に屬し、而して牧人は兵士と同一の地位に在るものであつて、各自の庭園を除き、土地及び其の他の生產資料は、悉く皆、共同である。土地は集合的に使用せられることがないが、而も、農夫及び牧人は等しく其の收益を共同の消費の爲めに共同の倉庫に輸致し、單に農作の秀拔なるものに賞典を賦與するに過ぎざるが故に、貨幣若しくは商業階級を必要とすることがないのである。又、イアムブロスは其の『太陽國』に於いて、赤道直下に於ける拜日教徒の樂園を叙した。此處には樹木は決して熟した果實を絕やすことなく、市民は常に其の力と美とを失ふことがない。總べての者は、智慧に於いてすら、平等であり、富と學問とは未知であり、階級鬪爭は存することなく、全般の社會的及び經濟的生活は總べて共同制度の下に置かれ、あらゆる生產資料の集產制度が認められ、同胞主義と自由勞働の尊嚴とは此の國の基礎を成し、而して、各人は順次交代に各種の勞働に從事す可きである。（Albert A. Trever, History of Ancient Civilization, vol. I. The Ancient Near East and Greece, 1936, p. 499.）。

二

羅馬も亦、希臘と同樣なる進化の跡を辿つた。羅馬は、初め、大家族即ち氏族の聚結に過ぎざるものであつて、家族團體は社會組織の基礎を形成し、別箇の實在としての個人は全然消滅して、國家と法律とは唯だ家族共同體のみを認めた。其處には農民又は手工と云ふが如き別箇の生產階級の存在なく、貧富大小の土地領有者が存するのみであつた。農業は早くからして羅馬經濟生活の大支柱であり、殊にエトルリア王朝の君主が放逐せられて後は、羅馬は全く貿易の潮流外に立ち、遲鈍なる農業經濟に依存して居つた。然しながら、夙に羅馬に於いて、排水用の隧道及び堰等の農業上の施設が行はれた事實は、土地が次第に增大しつゝある人口を支持するが爲めに其の生產力を枯渴せしめつゝあつたことを物語るものである。羅馬は驕がて低廉なる食物の供給を助成するを以つて其の重要政策の一としなければならなかつた。其の結果は、必然、農業階級、殊に小農民階級の利益を抑壓しなければならなかつた。第二マケドニア戰役時代以後、羅馬の兵士は常に國外から輸入せらるゝ食料を以つて支持せられた。而して、西班牙及びシキリアからの穀物供給は、低廉なる價格を以つて庶民に販賣せられた。小農民が、有利なる輸出品を供給する葡萄園及び橄欖林の經營を企圖することを得なかつたに反し、大地主は葡萄酒を輸出するが爲めに船舶を所有し、穀物を生產するよりも、寧ろ之れが輸入を計つた。牧場の經營も亦、資本を要するものであつて、同じく富者の手中に存した。而して、穀物の輸入增加は、小農民から生產物の市場を奪つた。長い戰役の間に著しく其の數を減じた自作小農民は次第に消滅した。小農場の廢墟の上に大農場は建設せられ、穀圃は葡萄園及び牧場と變じ、生產的勞働は奴隸によつて行はれることが愈々多きを加へた。終には、亞弗利加の屬領及び帝國領域の他の部分から羅馬市に向つて多量の穀物が積み出されることゝ爲つた。然しながら、全體として言へば、帝國は大體に於いて自給的であつたのである。洵に、最初狹隘なる範圍內に於いて自給的であつた羅馬は、次第に其の自給難を感ずる

に連れて、益々其の屬領を膨脹せしめ、其の自給主義の限界を擴張せしめたものとも稱することが出來よう。羅馬の世界的帝國内に於いて夥しく多數に分立した經濟的中心は、往來頻繁なる街道によつて連結せられた。原始生產に從事しつゝある地方と組織的に原料品を處理しつゝある地方とは、種々なる中心に於ける種々なる種類の經濟的特殊化と共に、活潑なる相互交易と顯著なる相互依存とを生ぜしめて居つた。（The Cambridge Ancient History, vol. xii, The Imperial Crisis and Recovery A. D. 193-324, 1939, p. 232.）。

斯くて、羅馬帝國は高度の都市的繁榮を來し、都市ブールジュワ文化に基礎を有する自由經濟體制を進歩せしめたのであるが、而も、軈がて誇張せられた個人主義に對する反動として、國家的自我主義、聯隊的編成、標準化及び獨裁的態度を以つて特徴とする國家社會主義は其の歩を進めた。而して、之れに次いで、誇張せられた國家社會主義に對抗して、封建的領主によつて代表せられる新たなる個人主義は發生し、ブールジュワ的都市文化及び經濟から封建的田園的文化及び經濟に移るの傾向は次第に顯著と爲つた。（ibid., p. 281.）。早く既に西紀第一世紀に始まつた地方分散は、夙に西紀二百年の交に於いて、初期羅典基督教父をして經濟的地方主義に立脚せる言説を行ふに至らしめた。即ち、カルタゴ人テルツリアヌス（Quintus Septimius Florens Tertullianus）は其の『婦人の衣裳に就いて』に於いて、信徒に向つて、神が彼れ等の間に潤澤ならしめたるもの、換言すれば、地方的に生產せらるゝものを以つて滿足し、外國より輸入せらるゝ奢侈品を追求することなかる可きを勸告した。（The Writings of Quintus Sept. Flor. Tertullianus, tr. by S. Thelwall and Peter Holmes, Clark's Ante-Nicene Christian Library, vol. xi, 1869, On Female Dress, pp. 313-314.）。

三

中世は領域的若しくは地方的なる高度の經濟的割據主義を以つて其の特徴とする。經濟的には、大多數の中世國家は、共同の政治的首長の下に於ける或る程度まで自給的なる諸單位の弛緩なる集團であつた。中世的君主は政治的にも多く無力微弱であつて、多數の小領域的共同體は略ぼ完全なる獨立を享有して居つた。交易經濟は單に狹少なる範圍内に於いて發展を見たに過ぎなかつた。加ふるに其の目的とする所は、一地方全體の利害であつて、是れが爲めに個人的行動の自由を拘束し、且つ市場を封鎖し、高率の入市稅を其の地方外の生產物の移入に課して之れを防止せんとした。都市のギルド及び有司は、全力を擧げて、其の地方の商人及び手工業者の利益を增進せんことを努めた。組合外の商人は其の地方の消費者と直接に取引を行ふことを禁ぜられ、ギルド商人は外國の君主から通商上幾多の特權を享有し、而して、他の地方に赴く自地の商人を援助するの目的を以つて都市間の協商が締結せられた。地方的供給は大なる警戒を以つて防護せられたが、然も、飢饉の不安はあらゆる種類の政策による移入を奬勵せしめたのである。地方的自足を確保せんとするの努力は、大革命の前夜に至るまで、佛蘭西に於ける各州間の穀物交易を妨げて居つたと言はれてゐる。

而して、中世最大の思想家聖トマス・アクイナスは、實に、公の財政に於いても、又、私の家計に於いても、等しく自給自足を以つて經濟的理想と做すものであつた。國家は或ひは自己の資源により、或ひは又、外國貿易を通じ

て其の必要品を供給せられる。安全の點よりするも、又、德敎の上より觀るも、後者に比して前者の優ることは明かである。戰爭の際には、自給自足は住民をして輸送の困難若しくは輸入の杜絶より生ず可き幾多の艱難を免れしめる。平和時に於いても亦、自國產物を豐富に有することが國家に取つて一層望ましいのである。蓋し、其の國が多數の貨物を缺くとしたならば、同國は必然外國貿易に依賴しなければならず、是れに由つて多數市民の風儀を壞亂するに至らしむ可きが故である。外國商人は彼れ等の法規、慣習及び生活樣式を齎して、國家に危害を與へる。而して、市民にして若し外國商人の例に從つたならば、市民間の睦じい交際は攪亂せられる。加之、市民自らが貿易に着手するならば、幾多の罪惡に對して門戸は開かれる。卽ち、商人の最大なる熱意は利潤の獲得に指し向けられ、是れに由つて貪慾心は市民の心胸に入るに至り、其の結果はあらゆる物をして金次第ならしむるが故である。信實は減退し、欺瞞は增加する。總べての人は唯り自己の特殊利益のみを求めるが故に、公共の利益は無視せられる。德の報酬たる名譽が總べて是れ等の人々に與へられる時、市民的德を愛するの念は消滅する。斯くの如き國家に於いては、市民的交際は腐敗せるものと爲る。（De regimine principum, ii, 13.）。彼れは、君主の收入を論ずるに當つて、王領地と蓄寶とを是認し、官職の賣却を問題とし、債務を痛烈に非難し、非常時に於いてのみ租稅を許容するものであつた。彼れは又、「嚴密に言つて生活に取つて必要なるものに富む者は、純然たる貨幣に富む者よりも富裕である」と論じてゐる。（In VIII libros politicorum seu de rebus civilibus commentaria, Lectio v, Parma ed., p. 389.）。

聖トマスは、アリストテレースに從つて、貨幣取得術（pecuniativa）を貨幣使用術（œconomica）より區別し、前者を以つて後者に從屬するものと做した。貨幣及びあらゆる種類の富は單なる經濟的用具たるに過ぎざるものである。（ibid., p. 348.）。是れ等兩者の相違は、織物業の爲めに梳を製造するの術、即ち道具を供給するの其れと、羊毛を準備するの術、即ち原料を供給するの其れとの相違に比較せられた。專ら貨幣のみに關する貨殖の術は無窮である。各箇技術の目的に關する願望は際限のない願望であるが、其の技術の期圖に役立つ諸物に對する願望は限られたる願望である。卽ち、それは其の規矩準度としての這般の期圖によつて精確に限定せられるが爲めである。然しながら、金儲けの術の目的は單に金を儲けるに過ぎざるものであつて、是れに對しては何等の極限も存することを得ざるものである。而も、一定の目的に對する貨幣の使用に關する政治的經濟術は際限のない富を求めるものではなくして、唯り其の目的に對して助けと爲る可き底の富のみを求めるのである、而して這般の目的は其の國の良好なる狀態である。（ibid., pp. 390-391.）。斯くて通商貿易の如きも、之れを行ふ者が生活するに充分なる貨幣を確保し、又、其の隣人の幸福增進に資せんことを目的とする限りに於いて是認せらる可きものである。若し其の隣人若しくは其の國民の利益が之れを要求しなかつたならば、それは拋棄せられるか、若しくは外人に讓渡せらる可きであつた。

然るに、伊太利亞及び南部佛蘭西地方の商人の活躍、數次の十字軍及び東西兩洋の交通は、遠隔人民との接觸によつて利用し得可き貨物の範圍を擴張した。新大陸に於ける鑛坑の發見は著しく歐洲の通貨を增加せしめ、主とし

て物々交換に基礎を置いた舊い封建經濟は新しい貨幣經濟に其の道を讓り、而して、後者の範圍は到る處に於いて擴張せられた。之れと並んで、スコラ哲學の束縛より解放せられんとするの努力　文藝復興は人間の欲求を拘束せる倫理的桎梏を除去し、而して、宗教改革、殊にガルヴァン教は經濟的精力を解放し　商業的精神の進出に對して基督教的裁可を與へた。中世的制度は皆、日を追うて經濟上の障害と爲つた。人民は是れ等の煩を避けて　更らに廣大なる單位を形成し、更らに遠大なる利益の同盟を締結するに至つた。斯くして、都市的であつた法律經濟の制度は漸次國家的と爲り、次第に強大なる民族的國家並びに國民經濟形成の時代に入るのである。近世國家の興起と共に、手工業、市場及び外國貿易等は、孰れも皆、都市的制度及び組合的自治統制に代つて國家的規制を受くることゝ爲り、斯くて自給自足の國家的經濟政策は、到る處に於いて、あらゆる國家的政治的權力を傾注して實施せられたのである。

然しながら、前述の如く、既に新財貨及び新趣味が誘入せられ、又、貪慾を以つてあらゆる商企業の必然的基礎と看做して之れを憎惡せる中世的思想が漸次變化を來しつゝあつた此の時代に於いては、自給自足主義は、其の範圍を擴張して國家的アウタルキイに赴き、自國及び其の屬領並びに其の勢力圏内に存する地域より成る一大帝國の建設に由つて、其の構成部分をして相互に其の補充的欲求を滿足せしめるか、若しくは又、之れを廢棄して經濟的國際主義に進み　外國貿易によつて相互に連結せられる國際的相互依存の制度、國際的交通主義に移るかの孰れかでなければならなかつた。

四

先づ、國内充實の舊政策は國力增進の新政策に其の道を讓つた。國力は外國船舶の使用によつて有害なる影響を受ぐるの虞れあるものと做して、自國艦船の增加が主張せられた。大哲フランシス・ベーコンは、英國王ヘンリィ七世が、「陸によると等しく、海によつても亦、其の王國を威力あるものたらしめんことを念とせるが故に、更らに良く海軍力を維持するが爲めに、『ガスコニィ（Gascoign）及びラングウェードック（Languedoc）の諸地方よりの葡萄酒類及び大青類は、英國船によるの外、齎さるゝを得ざること』を命じた、蓋し、此の國（estate）の舊政策を撓めて、豐富に重きを置けるものを兵力に重きを置くに至らしめたが爲めである。其れに對して、殆んど總べての舊條例はあらゆる手段を講じて外國商人を激勵し、總べての種類の貨物を輸入せしめんとするものである、蓋し、低廉を以つて目的とし、海軍力に關する國家の地位を注意することがなかつたが爲めである」と說いてゐる。（Bacon, The History of the Reign of King Henry VII., in The Moral and Historical Works of Francis Bacon Lord Verulam and Viscount St. Albans, 1862, p. 361.）（昭和七年版拙著『重商主義經濟學說研究』一三五頁參照）。

初めは主として流通資料の缺乏を恐るゝが爲めに、其の輸出を禁止せられた貴金屬は、今や主として是れを以つて「戰爭及び國家の筋力」と看做し、其の國家的蓄積を要求するの念に驅られて其の輸出入に重大なる注意が拂はれるに至つた。（『社會經濟史學』第十卷第四號所載拙稿『英國重商主義の商人主義的性質』四―九頁參照）。「佛蘭西商品の輸入に由つて英國の手工は無用と爲る」と一千五百二十年の民謠 Nowe a Dayes. 中に謠はれて、人民の職業

を奪ふあらゆる輸入は拒否せられ、又、サー・トマス・モーア等によつて農業を破壞する牧畜業は非議せられたのであるが、（前掲拙著八〇六―七頁參照）、時代の經過に連れて、國防的見地は一層有力と爲り、全農業及び商業制度の基礎を成すに至つた。彼の一千五百八十一年版の A Compendious or Briefe Examination of Certayne Ordinary Complaints. の如きは、假りに羊毛の輸出が金銀を齎すに十分であるとしても、羊毛が最も有利なる輸出農產物と爲る時は、總べての人は悉く牧羊に從事するに至り、軈がて臣民の多數は消滅して、國家を防備するに足る人數を國內に殘さざるに至る可きを警告してゐる。（『三田學會雜誌』第三十三卷第一號所載拙稿『一千五百八十一年版タブルユー・エス・ヂェントルマン著、種々なる人々の有する目下の不平の簡略なる檢討』一一四―五頁參照）。洵に、「國防は富裕よりも重大なるもの」と觀ぜられる時が來たのである。

生產力を涵養し、外國產物の輸入を抑制し、自國貨物の輸出を奬勵するの新政策は、豐富且つ低廉に財貨を確保するの舊政策に代つた。英佛先進諸國に比し、著しく後れて、第十七世紀に於いて、漸く中世主義より近世的國家への進路を開かんとして惡戰苦鬪を續けて居つた獨逸に於いては、專ら此の時代の商業政策を指導したものは自給主義であつた。一千六百八十四年に公にせられたヴィルヘルム・フォン・ホルニックの著 Oesterreich über alles, wann es nur will. に表明せられた思想の主點が、國家的自給自足に存して居つたことは、吾人が他の機會に於いて述べたが如くである。（『三田學會雜誌』第三十一卷第九號所載拙稿『ヴィルヘルム・フォン・ホルニック著一千六百八十四年版、唯だ意圖すれば、墺太利は萬國に優越するを得可きである』參照）。一國の力と優越とが其の金銀の餘剩と其の自足（Subsistenz）に取つて必要若しくは有用なる總べての他の物件、洵に又、可能なる限り、他國に依賴（Dependenz）することなく、自己の資源より生じたる底の總べてのもの、並びに之れと同時に其の適當なる管理、使用及び供用に存するならば、一般國家經濟（Lands-Oeconomie）は、如何にして斯くの如き餘剩、管理及び享樂が自己の財產から、又他のものに依賴することなくして、若しくは斯くの如きことが總べての點に於いて可能でない場合には、最小可能なる對外依存を以つて、又、內國正貨を吝んで、遂行せられ得るかを考察しなければならぬ結果と爲るのである。斯くて、著者が、這般の目的に特に役立つ可き九箇條の國家經濟的主要準則を規定したことは囊きに紹介したが如くである。（前掲拙稿一四三―一四四頁參照）。

然るに、早く近世的國家を構成することの出來た英國に於いては、第十六世紀の論者は猶ほ國家的全體的見地から立論するものが多かつたのであるが、第十七世紀に入ると共に、商人的特殊的見地よりするものが俄かに多きを加へた。此の時代の經濟論者中に在つて鉚々たるものの多くは商業資本階級の鬪士であつて、彼れ等は特に其の關與せる業務上の利害から立論し、而して、一定の範圍內に於いて、國民的自給自足の概念に對して國際的相互依存の其れを支持したのである。斯くて、先づ貴金屬、殊に銀の輸出並びに奢侈品、殊に東印度貨物の輸入に關し、國家は果して商人若しくは商事會社をして其の任意に行動せしめるに由つて利益を受くるや否やの問題は軈がて一般的性質を帶びることゝ爲り　時代の思潮を經濟的自由主義に導くに至るのである。吾人は又、第十七世紀の頃に於いて、外國貿易が、啻だに國家をして富裕ならしむるが爲めに有用であるばかりでなく、國家を維持するが爲めに

も亦、必要缺く可らざるものと爲るに至つたと做す論據の一に、兵器及び軍需品に於ける變化の存して居つたことを擧示しなければならぬ。即ち、ニコラス・バーボンは、其の一千六百九十年の匿名の著 A Discourse of Trade. 中に於いて、各地に於いて容易に發見することの出來る資料から成つて居つた古代の兵器及び軍需品は、今や其の用ゐ見ざることゝ爲り、火藥の發見が隨處に發見することの出來ない鑛物を資料とした新しい兵器及び軍需品を採用せしめたが爲めに、之れを有することのないものは、貿易によつて取得しなければならぬことゝ爲つた旨を論述してゐる。（前掲拙著一五九頁參照）。

貿易論は長く國防論から離れることが出來なかつた。英國東印度會社に對して加へられた非難の一も、東印度貿易が英國の海上權を危ふからしめると云ふに在つた。而して、同會社の重役であつたトマス・マンの如きは、東印度貿易が、同貿易の開始せられる以前に比し、絶えず二萬タンの艦船及び四千の海員並びに船舶の建造及び修理と大砲、小銃、彈丸、火藥、刀劍、矛槍、繩索、帆布、其の他必要なる諸軍需品の製造とに從事する技工及び工匠を餘分に使用して、武力の著しい增加を來して居ることを辯明しなければならなかつた。（前掲拙著九五―九六頁其の他參照）。

軍需品の確保は、常に當時の經濟論者の念頭に在つた。東印度會社及び東邦會社の兩者に加入して居つた商人ルイス・ロバーツは、一千六百四十一年に出版せられた其の著 The Treasure of Traffike, or A Discourse of Forraigne Trade. に於いて、輸出せらる可き商品及び輸出す可からざる商品、並びに輸入せらる可き商品及び輸入す可らざる商品に就いて論じ、一國が豐富に有する商品の輸出は許容せられ、其の國が不足を感ずることある可き貨物若しくは其の外國に於いて使用せられることが自國に取つて有害なるの虞れある貨物は輸出を許さる可きではなく、又寶石、珠玉、芳烈なる香具、高價にして不必要なる香料並びに贅澤なる織物の如き放縱奢侈に役立つ總べての貨物は輸入を禁止せらる可きであり、穀物、牛酪及び總べての食料品の如き必要なる貨物、軍需品並びに國民をして仕事に從事せしむる貨物は輸入せらる可きであると做してゐる。（『三田學會雜誌』第三十卷第七號所載拙稿『ルイス・ロバーツ著一千六百四十一年版、外國貿易論』九一―九二頁參照）。而して、是れよりして五十年の後に於いて、バーボンは、前掲書中に於いて、交易の利益の一を以つて、そが兵器彈藥の倉庫を準備するに由つて國家防備の上に有用なるに存すると做し、而して、這般の利益は、帝國の擴大を助成するを得るに在るものであつて、若し世界的帝國が再び此の世に建設せられ得可しとしたならば、そは恐らく交易の援助、陸上に於ける軍隊よりも海上に於ける船舶の增加に由つて行はる可きものであらうと觀て居つた。（前掲拙著一六二頁參照）。東印度會社の主宰者であつたサー・ジョサイア・チャイルドは、其の一千六百八十九年十一月十八日官許の A Discourse about Trade. に於いて、航海條例に對する反對論に言及して、英國は島國であつて、其の防備は常に船舶と海員とに存するが故に、利潤と武力（Profit and Power）とが相關聯して考察せられることが絶對に必要なるの觀があると說いて居つた。彼れ曰く、「我れ等の海上に於ける勢力にして甚しく損傷せられたとしたならば、我れ等は其の隣邦からあらゆる種類の危害と侮辱とを受くるの虞れあるものであつて、終には我れ等をして賤劣悲慘なる人民たらしむ可

きである」と。(ibid., pp. 93-94.)。

而して、一國民は武力なくして安全なるを得ず、兵力は財力に依らずして取得せられ確保せらるゝことを得ず、又、一國は管理宜しきを得た廣大なる交易の助けに依るの外、富裕と爲るの道なく、而して、如何なる國土と雖も、單に自己の天産物輸出のみを以つて巨大なる富を取得し得る迄に豐沃なるものなしと做すの見地からして、チャールズ・ダヴェナントの如きは自由貿易論に接近せんとするの概を示したのである。(前掲拙著一六六―一六七頁參照)。

五

所謂重商主義時代に於ける保護貿易論の主張は、輸出超過を確保し、以つて順調の貿易に由つて一國内に於ける貴金屬の高を增大せんが爲めに輸入を制限せんとする貿易均衡論に基礎を置くものと稱せられて居るのであるが、而も、事實、其の論據は複雜であつて、前述の如く、或ひは國家防備の立場から主張せられたのみならず、或ひは未發達産業育成の觀點より、或ひは其の人民に職を與へ若しくは其の失業を防止するの目的を以つて力説せられたのである。然も、是れ等のものは又、孰れも皆、貿易均衡論と密接の關係を有するものであつた。

前掲 A Compendious or Brief Examination. は、外國品の輸入を防止するか、若しくは、自國民をして外國人よりも低廉に其の貨物を供給することを得せしめるやうに、之れに關稅の重荷を擔はしむ可きことを主張し、(op. cit., fol. 26.)、又、新たなる製造業の奬勵せらる可きこと、並びに一定の新技術若しくは職業を誘導し、是れに由つて人々に仕事を與へ、國家に金銀若しくは貨物を輸入するの路を開いた者を表彰す可きことを説いた。(ibid., fol. 37.)。英國をして戰はずして其の敵國和蘭を擊破せしむ可き諸策を建つるに鋭意であつたアンドルー・ヤランダンは、一千六百七十七年に公にせられた其の England's Improvement by Sea and Land. の第一部に於いて、英國に輸入せられる總べての亞麻絲類に對して、少くとも一磅に就いて四志、一エル四志以下なる總べての亞麻布に對しては一磅に就いて三志の關稅を賦課し、而して之れを七個年間存續せしめて、其の間に幼年期(Infancy)に於ける亞麻工業をして深く其の根柢を固めしめ、又、總べて英國に輸入せられる外國條鐵に對しては一タン三磅・鐵製品に對しては六磅の課稅を行つて自國の鐵工業を奬勵せんことを提唱した。(前掲拙著七一〇頁參照)。南海會社の重役サー・スィーオドア・ジャンセンは、一千七百十三年に刊行せられた General Maxims in Trade. に於いて、「賢明なる諸國民は製造業を其の幼年期に於いて奬勵せんことを欲し、斯くて彼れ等は單に同種の外國製造品に負はしむるに高き賦課を以つてするのみならず、屢々其の消費を全然拒否し、禁止する」と論じた。(『三田學會雜誌』第二十九卷第四號所載拙稿『サー・スィーオドア・ジャンセン著一千七百十三年版、特に大不列顛及び佛蘭西間の通商に適用せられたる貿易の一般準則』一三四頁參照)。而して、彼れの論敵ダニエル・デフォーの如きも亦、重要なる國産、毛織物業を害することのない英國製造業を奬勵せんとするの案を提唱する者であつて、同じく幼稚産業保護論者として觀らる可きものであつた。(An Humble Proposal to the People of England for the Encrease of their Trade and Encouragement of their Manufactures, 1729.)。

第十七世紀の後半に於いて、織り上げられ漂白せられた亞麻精布が和蘭及びフランダーズから、亞麻粗布が佛蘭西から、又狹い粗布及び亞麻絲が獨逸から供給せられて居つた事實は、英國をして外國に依存せしめ、其の自給自足主義を侵犯するものと看做された。(cf., Yarranton, England's Improvement, op. cit., pp. 45, 144-145.)。是に於いて乎、リチャード・ヘインズの如きは、其の一千六百七十七年の著 Proposals for building in every County a Working-Alms-House or Hospitals. 其の他に於いて、各郡に其の面積又は人口に從つて、一定の大さの授産救貧所を設立し、貧民を持續的に亞麻工業に使傭す可きことを主張した。(前掲拙著七〇四―七〇七頁參照)。ヤランタンは、獨逸の各市には、六歳以上の少女に亞麻絲紡績を教へる學校のあることを說き、英國に於いても、之れに倣つて兒童に紡績を教授す可き公立學校を到る處に建設す可きことを論じ、又、フライブルグ、ドルト、獨逸及びハーレムから織匠、製絲工、紡績工女及び漂布工を招致す可きことを主張した。(前掲拙著七〇七―七〇八頁參照)。トマス・ファミン亦、其の一千六百七十八年の Some Proposals for the imploying the Poor. 其の他に於いて、彼れがリンネル製造業に貧民を使用するの目的を以つて授産所を設立せる經驗に就いて述べ、又、貧民の多い各教區に於いては、貧兒に仕事を教ふるが爲めに、「授産所の性質を有する學校」を設立して、單に紡績ばかりでなく、苟も兒童の行ひ得るあらゆる仕事を教授す可きことを提案した。(同書七一〇―七一二頁參照)。

然しながら、軈がて、斯くの如きリンネル工業振興策が果して國家的利益であるか如何かの問題が喚起せられた。チャールズ・ダヴェナントは其の一千六百九十七年の An Essay on the East-India Trade. に於いて、リンネルを國內に於いて生産するよりも、之れを自國産の羊毛製品と交換して海外より輸入するを以つて得策とすると論じた。(前掲拙著一七四―一七五頁參照)。英國は自給主義を拋棄して、最も自國に適せる産業に其の精力を集中す可きものであると云ふ主張は、漸くにして其の勢力を得んとしつゝあつたのである。

ウィリアム・ペティは、其の一千六百六十二年の著 A Treatise of Taxes & Contributions. に於いて、和蘭の工業にして英國の其れを凌駕するとしたならば、彼れ等の精良なる職人の多數を誘致し、若しくは自國の最も器用な者を彼の地に派して之れを學ばしむるを得策とするに非ずやと主張し、未發達産業保護說を提唱しつゝあるが如くである。(ibid., p. 41.)、一千六百九十一年版 The Political Anatomy of Ireland. に於いては、「何が故に吾人は吾人自身の勞働及び國土が生産することの出來ぬ外國商品の使用を禁止しなければならぬか、吾人は是れに由つて節約し得た人と土とを以つて是れ等の貨物及び其の他の物をも購入することの出來る輸出貨物の産出に使用し得るではないか」と論じ、(ibid., p. 83.)、又、九十年版 Political Arithmetick. に於いては、「普通に見られるが如く、各國は自國天然の貨物の加工によつて繁昌する」と說いて、國際的分勞論に向つて進んだ。(ibid., p. 16.)。而して、チャールズ・ダヴェナントも亦、前掲書中に於いて、「相異る土壤及び國々の種々なる産物は、是れ等のものが相互に助けと爲り、而して互に他に對して必要品を供給す可きことを欲した天意の指標である」と宣言した。(The Political and Commercial Works of that celebrated Writer Charles D'Avenant, LL. D., vol. i, 1771, p. 104.)。而して、「貿易は有り餘つたものゝ交換に外ならざるものである (Trade is nothing else but a Commutation of

Superfluities)、例へば、余は余が欲し而して汝が手離すことの出來る汝の或るものに對して、余の手離すことの出來る余のものを與へるのである」と言ふ原理は、サー・ダッドリィ・ノースによつて其の一千六百九十一年の Discôurses upon Trade. 中に表明せられたのである。(ibid., p. 2.)。

六

經濟的自給主義は、其の初めに於いては、攻擊よりも寧ろ防禦を目的とするものであつた。而も、そは其の遂行に際して侵略的なる經濟的國家主義の相貌を取るの傾向を避けることが出來なかつた。國家資源の擴張は國家的安全の增進に供せられやうとした。國力增進の政策は國內充實の政策に優越するに至つた。そは容易に或る種の排他的なる經濟的帝國主義に轉換せしめられることが出來た。斯くの如き間に於いて、所謂重商主義的理論及び政策は其の事業を完了した。是れ等のものは中世的制限を廢棄し、强大なる統一的民族國家を出現せしむるに與つて力があつた。集權的民族國家は又、初期資本主義が成熟せる產業資本主義に發達するに至る迄、交易を奬勵する有力なる手段と爲つた。英佛の如き這般の過程が先づ最初に完了した諸國に於いては、國力は直ちに新たなる用途に轉ぜしめられた。そは經濟力を獲得するが爲めに產業を助成しなければならなかつた。技術的進步は初期重商主義時代の制限せられた市場によつて阻害せられて居つた。商業的特權の時代に於いては、既得の利權は强大であつて、其の獨占を脅す新しい方法を妨止するに足るものがあつた。他方に於いて、技術的改良が有利と爲るが爲めには、市場の擴張を俟たなければならぬ。這箇市場の擴張は商業資本主義其の者によつて生ぜしめられた。第十八世紀に於いて、商業的膨脹は在來の自由競爭の制限を覆さうとすると共に、又發明を刺戟した。斯くの如きものは、工業的生產を改良し擴張するによつて、商業資本主義の基礎其の者を破壞するものであつた。(Erica Roll, A History of Economic Thought, 1938, pp. 87, 96.)。

他方に於いて、商權擴張によつて誘起せられた國際的戰役、植民地建設の財政的負擔、植民地を以つて母國の利益に從屬奉仕せしむ可きものと做す重商主義的制度によつて喚起せられた植民地の叛亂は、第十八世紀の終り迄に、領域的自給自足に對する要請を遍く復活せしめつゝあつたのである。アンリィ四世に始まる重商主義の線に沿へる商工業の改造が、リシュリュー公、マザラン、特に又、コルベールによつて續行せられ、農業は頹廢せんとし、ルイ十四世の登極以來、農產物は三分の一に減少し、國民的資本減退して、農民は往々種穀をさへ缺くに至り、廣大なる地域は荒廢に歸し、其の結果は又、製造工業の上に不利なる影響を及ぼし、之れに加ふるに、植民帝國たる其の地位が恰も土崩瓦壞せんとして居つた佛蘭西に於いて、殊に、「自然的秩序」(ordre naturel) に基礎を置いた重農學派の自給的自由國家が主張せられたのである。

重農主義者は、第十七世紀の中葉に於いて既に幾多の英國論客の間に共通の思想と爲つて居つた人及び土地を以つて國富の父母と做すの意見を傳へて、富と其の增加とは交換に基くと做す重商主義的信念を放棄し、富及び蓄積の爲めに利用せられ得き餘剩を創造するの力を生產の領域に移じた。(cf., Roll, op. cit., pp. 130-131.)。彼れ等に從へば、正常なる國家は、農業が最高度に發達して、毎年五十億フランの價値ある再生產を行ひつゝある自給自足

の一大王國である。（Auguste Oncken, Œuvres économiques et philosophiques de F. Quesnay, fondateur du système physiocratique, accompagnées des éloges et d'autres travaux biographiques sur Quesnay par différents auteurs, 1888, p. 309.）。富の源泉は商業、植民及び貨幣に存せずして、土地の產出物なることを主張し、國王アンリィ四世に向つて「農耕と牧畜とは佛蘭西の兩乳房であり、而して又、秘魯の眞の鑛坑であり、且つ財寶の蓄積である」と稱したスュリィ公の尙農意見は新たに追懷せられる所と爲つた。彼れ等に從へば、土地は富の唯一の泉源である、而して是れ等のものを增加するは農業である。（ibid., p. 331, 337.）。工匠及び製造業者の製作は富を增加するものではなく、費用の多い物品であつて、王國の收入の泉源ではない。（ibid., p. 343.）。斯くの如き貨物の賣價は最初の原料及び勞作者が、其の勞作中に消費する生活資料と同一價値のものである。（ibid., p. 537.）。外國貿易は單に收穫の餘剩を處理するが爲めの應急策に過ぎざるものである。商業は毫も新たなる價値、新たなる富を創造するものではなく、商人によつて致さしめられる價格の騰貴は、買手としての商人が適正價格を支拂はないか、若しくは賣手としての彼れが適正價格以上に其の價格を定めるかの孰れかの一方によつてのみ唯り說明せられることが出來る。孰れの場合に於いても、其の費用は終に生產階級の上に歸する。後者は、結局に於いて、商人によつて蒙らしめられる虛費（faux-frais）を支拂はざるを得ないであらう。（ibid., p. 470.）是に於いて乎、一國に取つて最も有利なる政策は、其の農產物、斯くて又、純收益の持續的且つ累進的增加並びに賣買業者（marchands revendeurs）の利得を極度に制限すること、即ち、彼れ等の勤務に對する支拂を出來得る限り低からしむる可きことである。而して、這般の目的を達成す可き最も合理的なる手段は完全なる交易の自由であると觀ぜられた。（ibid., pp. 669-671.）。

七

英國に於いては、之れと略々時を同じうして、ジョーゼッフ・ハリスは、其の一千七百五十七年の An Essay upon Money and Coins. の第一部に於いて、先づ土地と勞働とが總べての富の泉源であることを說き、劈頭、「此の地球は人間の生活を快く支持するが爲めに、無限に多樣なる資料を夥しく有してゐる。最も强烈なる食欲を飽足せしむるに充分なる以上の植物性及び動物性の夥しく多種多樣なる食料の外に、木材、石材、金屬等が如何に見事に彼れ等の種々なる用途に適用せしめられるか！」と述べ、（ibid., p. 1.）、而して、「神の攝理の賢明なる指定に由つて、人々の間に於ける相互の交際及び商業は、彼れ等の禍祉に資すると共に、又必要でもある。あらゆる人は他人の助けを必要とするの狀態に在る。又、あらゆる國は其の自然的若しくは人工的なる過剩產物の或るものを其の欲望する外國產のものと交換するに由つて利益を受くることある可きである」と論じ、（ibid., p. 14.）、人々が種々なる才能及び傾向を賦與せられ、是れに由つて彼れ等は自然に相異れる職業に向はしめられ、又之れに適せしめられ、而して、彼れ等が他の方法を以つてしては安易且つ快適に其の欲望する必要品の總べてを取得することが出來ない所から、特殊の技術及び業務に其の身を託するの必要に驅られ、是れに由つて或る人の他に對する依賴を生ぜしめ、又、自然に人々をして社會に結合せしめると等しく、總べての國家は、其の自然的及び人工的產物の種類に

於いても、品質に於いても、孰れも幾分相違するが故に、特殊の人々は最も遠隔の國民と通商するに由つて、社會一般に延長する彼れ等の利益を看出すのであると做して、國際的分勞に立脚せる國際貿易理論を表明したのであるが、（ibid., p. 15.）、而も、最も多くの人に對して仕事を看出すに由つて國内に於ける勤勞を增進せしむるに資すること最も大であり、又、自國の防備若しくは更らに快適なる生存の孰れに取つても有用且つ必要なる底の外國貨物を其の國民に供給する貿易を以つて最良と看做さなければならなかつたのである。（ibid., p. 24.）。

是れよりして約二十年の後、アダム・スミスは同じく分勞の利益から進んで國際貿易の利益を論究した。（Wealth of Nations, vol. ii, 1776, pp. 36-37, 38-39.）。然しながら、彼れは内國産業奬勵の爲めに外國産業に一定の負擔を課することが概して有利なる可き場合の存することを想定し、第一に、國家の防備に取り必要なる特殊の産業を擧げ、經濟上の利害と等しく政治上の利害にも亦注意し、周知の如く「國防は富裕よりも遙かに一層重要なり」との理由に基き、彼の航海條例を以つて、英國の總べての商業規制中、恐らくは最も賢明なるものであらうと論じたのである。（ibid., pp. 44-46.）。

英國に在つては、帝國内に於ける自給自足の理想は母國によつて課せられた租稅及び統制の制度に對する亞米利加植民地の叛起によつて破られた。アダム・スミスの書中に表明せられた合理的自由主義は、著者自身の想像したよりも容易に且つ急速に全歐に傳播し、一般の承認する處と爲つた。亞米利加植民地の獨立運動を鎭壓することの出來なかつた英國は、是れに由つて更らに自由なる政策を採用す可き實際的警告を受けたのである。而して、アダム・スミスは軈がて「現代を說服し、次代を支配する」に至るのであるが、而も、英國は其の後長く佛蘭西と死鬪を續け、經濟的利得よりも寧ろ戰勝を念頭に置いたが爲めに、自由貿易論の效果は、猶ほ暫くは、明瞭に之れを認めることが出來なかつた。

佛蘭西は、ナポレオン一世の「大陸封鎖」（Blocus continental）に由り、自國及び其の同盟諸國の領域並びに被征服國の其れを抱擁して或る程度まで自給自足的なる帝國を構成せんとした。佛國と其の同盟諸國とは英國の商的繁榮を破壞するの目的を以つて英國貨物の入るを拒んで自己を封鎖した。

大陸封鎖令の發せられた翌年、即ち一千八百〇七年、ウィリアム・スペンスは其の小冊子 Britain independent of Commerce. に於いて、是れ迄、富の泉源を探求して來た二種の經濟學者、即ち、重商學派と重農學派の所說を批評し、而して、國内の消費を目的とする農業及び製造業のみが國富の生産及び蓄積に取つて必要なる産業部門であることを主張し、外國貿易を有することのない一國は、洵に或る種の富を有することはないであらうが、而も、十中の九迄は、其の國が、自己の資源に滿足して、神の恩惠に依つてあらゆる地方に於いて著しく寬大に給與せられた原料の上に其の勞働を使用したならば、そは人類の幸福に貢獻すること最も大なる富の遙かに一層大なる高を享有し得可きであると觀た。「斯くの如き推斷は亦、單に理論的思辨の結果ではない。吾人は最大なる富が對外商業なくして創造せられることの出來る立派な現存の實例を有つてゐる。支那は常に這般の勤勞部門を故意に阻害した。貴國の乞食のやうな商業！　と云ふのが、北京の官吏等が之れに關して露西亞の公使ランゲ氏に物語るを常とした言

葉であつた』。然るに、支那は如何なる歐羅巴國民よりも遙かに大なる富の程度に到達した。而も、慥かに其の社會構造は其の在り得たが如く富の生産に有利なるものでは斷じてないのである。我れ等自身の其れよりも餘り大でない島國の日本も亦、外國貿易を有することなくして巨大なる富を取得せるものである」。(ibid., 7th. ed., 1808, pp. 38-39.)。彼れは、自國が輸出する物品の永續性及び必要性と、其の輸入する物品の其れとを比較する時は、其の貿易によつて富裕と爲るは、歐羅巴、亞細亞、亞米利加――其の貿易を行ふ總べての國々――であつて、英國ではないことを發見するであらうと做してゐる。英國は亞米利加の住民に被服、金物、陶器、最も緊切なる必要性と最大なる永續性とを有する數多の物品を供給し、而して是れに代へて忌はしい惡草、煙草を收受するのである。英國の貿易を行ふ他の總べての國々に就いても事情は同樣である。(ibid., p. 59.)。斯くて、英國を大陸から締め出さうとするボナパルトの兇惡な企圖は、慥かに長く效果を有することがないであらうし、又、亞米利加人も英國人に復讐せんとして以しからずして却つて彼れ等自身の上に責罰を蒙るに至る可きであらう。(ibid., pp. 76, 85.)。スペンスは斯くの如くに觀たのであるが、ウィリアム・コベットも亦、其の Cobbett's Weekly Political Register. に掲げた Perish Commerce. と題する論文中に於いて、同樣の意見を表明した。

然るに、之れに對してジェームズ・ミルは一千八百〇七年、Commerce Defended. に於いて、地域的分勞の利益を說明し、(前掲『經濟學史』上卷四〇二―四〇三頁參照)、而して、一國民の富の眞概念が其の年生産力の其れであることを主張した。一國は、其の人民の數に比例して其の年々創造する資産の高が大であるか若しくは小であるかに從つて、貧富の相違あるものである。而して、商業は其の國の土地及び勞働の兩者をより生産的に適用せしめ又分配せしむるに由つて這般の年收益を增加するに資する。例へば、自國の地上に於いて亞麻若しくは大麻を産出する代りに、吾人は穀物を産出し、其の穀物を以つて吾人は金物製造業者の多數を養ひ、而して、此の金物を以つて、吾人は、吾人の穀物を産出し又吾人の金物を製造する土地が生産す可かりしよりも大なる分量の亞麻を購入するとしたならば、斯くの如きは正さに吾人の地力の增加に等しいものである。(ibid., ed. 1808, p. 105.)。彼れを以つて觀れば、商業は自然に生ずる時には、そは頗る有益な物ではあるが、而も、極めて容易に、餘りに不廉なる價格を以つて購はれることのある物である。國民的富及び繁榮の二個の主要たる泉源は、國内の使用及び消費を目的とする土地の耕作と加工とである。外國商業は單に是れ等の兩者を援助する物たるに過ぎずして、其の唯一の效用は、該國民をして、一定の需要に對して其の供給を、そが國内に於いて是れ等のものを供給することが出來たよりも土地及び勞働の少ない費用で取得するを得せしめるに在る。又、如何なる程度に於いて、對外商業が有利である可きかは他の諸國民の事情に依存する。例へば、英國を繞る諸國が、英國の産出する一定の物品が是れ等の諸國に在つては甚しく高價格を維持し、之れに反し、英國の欲望する多數の他の物品が是れ等の諸國に在つては頗る低價格を有するが如き狀態に置かれてゐる際には、外國市場を目的として極めて多くを製造することが英國に適するのである、蓋し、同國は其の生産する所のものゝ小量を以つて、彼れ等の生産する所のものゝ大量を自己に供給するを得るが故である。然しながら、周圍の國々に於ける是れ等の物品が漸次高價と爲り、之れに反して英國よりの物品が

低廉と爲つたならば、是れ等諸國の爲めに製造を行ふことは次第に英國の利益たらざるに至る可きであらう。而して、英國の欲望する物品が彼れ等に在つて、英國が自己の土地及び勞働によつて是れ等のものを供給することを得る價格に騰貴す可しとしたならば、國内に於いて是れ等のものを用意し、而して、最早、是れ等の國々を目的として製造を行ふことなきを以つて其の利益とするに至る可きであらう。斯くて、對外商業の動搖は、國民的繁榮の甚しく誤つた表示を與へる。國民的繁榮は、或る場合には、之れを廢棄することに由つてすら企圖せられることがあるのである。(ibid., pp. 115-116.)。

ミルは、唯り生産の泉源に關してのみならず、消費の部門に關しても亦、英國人の間に誤解の多いことは前者に優るとも劣ることのないものであると觀る。直接の滿足に對する渴望に由つて人類の大部分は感發せられる觀があるが、蓄積を行はんとするの性向は、經驗より推して、尙は一層有力なる傾向なるが如くである。而して、苟も人々が其の財産の享有の安全である所に於いては、彼れ等の大部分は常に、其の取得する所のものをして彼れ等の使費する所のものを超過せしめんと努力するのである。此の有力なる原理に由つて、其の勤勞の餘地を有するあらゆる國民は不斷の進歩を爲し、每次の年收益を其の前年の其れに超過せしめんとするは當然である。(ibid., pp. 117.)。然しながら、斯くの如く有力且つ不動なる原理の作用に由つて、吾人は到る處に富裕と繁榮を期待す可きであつたのに、實際上に於いては、殆んど到る處に、貧困と窮苦とを見るの奇異なる矛盾は、那邊に其の解決を看出す可きであらうか。人類が、其の個々の能力によつて、增殖せしむるの傾向著しく强大なる財産は何者によつて減盡せしめられるのであるか。(ibid., p. 118.)。ミルは、沈滯と困窮の原因を戰役に求める。戰役は國民の繁榮を凋落せしむる有害なる風である、と彼れは言ふ。(ibid., p. 119.)。個人の創造的努力は、斷じて其の巨大なる消費に匹敵することを得ずして、繁榮の萠芽は食ひ盡される。(ibid., p. 121.)。是に於いて乎、彼れは、戰役に關する一般的考察を行ひ、更らに進んで、當時行はれつゝある戰役に論入し、今や英佛兩國は孰れも最早他に對して多くの損害を與へることの出來ぬ地位に到達した觀がある、と做してゐる。佛蘭西は毫も海上に於ける英國の優越を冒すことが出來ず、又、英國は毫も陸上に於ける佛蘭西の優越を冒すことが出來ない。是れ等兩國は頑張り續けて、互に相損傷し、其の夫々の人民の不幸を永存せしめることは出來ようが、孰れも何等の相對的利益をも取得することがないであらう、蓋し、兩者に在つて衰頽の諸原因は等しく作用す可きが故である。(ibid., p. 123.)。ミルは、英國は其の軍隊を大陸に送つてボナパルトを征服するの望みを抱くことが出來ず、齡猶ほ若くして、身體壯健、加ふるに、極めて節制を重んじ、盛んに體操を行ひ、且つ其の精神は常に亢奮を免れなかつたのであるが、今や平靜に歸せんとしつゝある彼れが死去する迄には恐らくは三十年を要するなる可く、佛蘭西に革命若しくは内亂の起る望みも薄しと論じて、當時の主戰論者の主張を擊破せんとしたのである。(ibid., pp. 124-127.)。

之れに對して、スペンスは更らに一千八百〇八年、Agriculture the Source of the Wealth of Britain; a reply to the objections urged by Mr. Mill, the Edinburgh Reviewers, and others, against the doctrines of the pamphlet, entitled "Britain Independent of Commerce". を著して論駁を試みた。

八

之れと略々時を同じうして、外國穀物輸入の危險から國民を保護するが爲めに農業の奬勵若しくは保護を行ふの必要ありや否やに關して、當時の二大經濟學者、即ちマルサスとリカードオとの間に意見の相違を見た。サー・ヘンリィ・パーネルは、一千八百十三年、議會に於いて、アダム・スミスが「國防は富裕よりも遙かに一層重要なり」と云へる言を引用して、其の國を飢饉より防止するに足る穀物を產出するは國防の部類に屬するものであると論じた。（昭和十二年版、拙著『經濟學史』上卷二七〇頁參照）。マルサスは其の翌一千八百十四年の著 Observations on the Effects of the Corn Laws, and of a Rise or Fall in the Price of Corn on the Agriculture and General Wealth of the Country. に於いて、外國穀物の供給に依存するの危險を擧示し、更らに其の翌十五年の The Grounds of an Opinion on the Policy of restricting the Importation of Foreign Corn. に於いて、大農業國たる隣邦佛蘭西が、其の前年、一クォータァに就き凡そ四十九志に達する迄は、穀物の輸出を自由ならしめ、而して、之れに達した後は、全然其の輸出を禁ずるの法律を通過せしめた一事を以つて、外國穀物の供給に依賴す可からざる最重要なる理由と做した。（前掲『經濟學史』二七三―二七六頁參照）。

然るに、是れに對して、リカードオは、其の一千八百十五年の小冊子 An Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of Stock. に於いて、英國にして若し規則正しく輸入を行ふ國と爲り、而して外國人が安んじて英國市場の需要に信賴することを得たとしたならば、穀物產出國に於いて、遙かに多くの土地が輸出の目的を以つて耕作せらるゝに至る可きことを述べ、英國に於いて僅々數週內に消費せられる穀物の價値を考察する時は、大陸にして穀物の莫大なる分量を同國に供給するに至つたならば、最も廣い範圍に亙つて破壞的なる商的災厄を來さしむることなくして、輸出貿易を遮斷するを得ざることを知る可きであると論じ、而して如何なる國家の元首又は其の聯合と雖も、進んで其の人民の上に這般の災厄を蒙らしむることを欲せないであらうし、又、之れを欲するとしても、如何なる人民も、恐らくは這般の方策に服從することがないであらうと說き、其の適例として、露西亞の原產物輸出を禁止せんとするナポレオンの努力が、此の國の人民をして彼れに叛起せしめた主要なる原因であつたことを擧示したのである。（前掲『經濟學史』三二六―七頁）。彼れは又、其の一千八百二十二年の On the Protection to Agriculture. に於いて、外國穀物に依存するの危險を擧げて穀物貿易の自由に反對する者に答へ、英國にして其の年々消費する定量の甚大なる部分を輸入するものと爲つたならば、英國の需要は疑ひもなく不斷であり、畫一である可きが故に、穀物の夥しい分量は、特に英國市場を目的として海外に於いて產出せられなければならぬが故に、穀物を收受することが英國の利益である以上に、之れをして何等の障害なく英國に到着せしめることが、同國向けの穀物を產出しつゝある諸國の利益であると論結して、後年の穀法廢止運動に對して寄與する所が大であつた。（前掲『經濟學史』三九二―三九三頁參照）。

リカードオ學派の經濟學は工業プールジュウォジィの支持を受けて廣く一般に承認せられ、立法上に於ける支配力と爲つた。英國は自ら所要の食料及び原料を生產するよりも、寧ろ其の利益の明白なる場合には、其の力を工業

に集中し、是れ等のものを購入するが爲めに工業製品を使用するに由つて其の富裕の程度を增加す可きものである。と考へられた。經濟學者は、工業に在つては收益遞增法則が作用するに反し、農業に於いては收益遞減法則が作用することを敎へた。大規模の機械生産は舊い家内制度の手工業に代つた。海峽は英國を侵略から免れしめた。ジェームズ・ミル等の豫想に反して、英國は遂にナポレオンを破つた。同國の船舶は世界の通商航路を支配した。英國の植民地は全世界に擴がつた。英國の貿易は飛躍的に增加した。自由貿易は英國商人が世界の市場を征服するの自由を意味するものと爲つた。英國は世界の工場と化しつゝあるものであつて、又、將來永く斯くの如き狀態を維持す可きものゝ如くに見えた。純然たる工業主義が果して結局に於いて危險と爲るの虞れがないか如何かに關して、マルサスのやうな自由主義者すら抱懷して居つた疑問は侮蔑的に排斥せられた。工業階級は舊ホィッグ關係の斷片を結合して自由黨を形成し、經濟組織の變化によつて喚起せられた政治的改革を遂行した。リチャード・コブデン、ジョン・ブライト等の指導の下に、反穀法聯盟は、一千八百三十八年九月十八日、マンチェスタァに於いて結成せられた。一千八百四十六年一月二十七日、穀法撤廢案は通過を見、翌四十九年六月には、航海條例廢止案が發布せられ、一千八百五十三年にはグラッドストンの第一回關税改革、同六十年には第二回關税改革が行はれて、自由貿易制度は事實上完成した。新興諸國の產出する食料及び原料に對して有利なる市場を提供するに由つて、英國は是れ等諸國の工業化を阻止することが出來る。平和外交、海軍々備縮少、戰時に於ける海洋自由は國際的交通を確保し又、英國の利益を防護するものであつた。

九

一時は他の歐洲諸國も亦、英國の政策に追隨せんとするもの〻如くであつた。佛國に在つては、初期の革命黨員は、自由の名に於いて、ギルドの獨占及び關税障壁の撤廢の如き重要なる經濟上の改革を斷行した。然るに、ジャコバン主義の優勝と共に、同黨員は舊ブールボン王朝の重商主義的政策の一部を復活せしめたのみでなく、幾分中世的經濟政策にすら復歸した。彼れ等は穀物の國家管理及び價格の統制に力を盡した。彼れ等は、有利なる輸出貿易を確保するが爲めに、佛蘭西は外國の競爭に對して高率の關税を以つて自國の諸產業を保護しなければならぬと考へた。彼れ等は又、强烈なる植民地政策、制限的航海條例、自國商船に對する補助金下附並びに大海軍に左袒した。（『三田學會雜誌』第三十卷第一號所載拙稿『國民主義經濟學』二五―一六頁參照）。

此の國に於いて反動的保護主義及び革命的社會主義が其の勢力を逞うして居つたとは又、經濟的自由主義をして直ちに其の發生の地英國に於けるよりも一層强硬であり、一層現實性に乏しいものたらしめなければ已まなかつた。「全自然を人間の支配下に置いたものは、熱と槓桿と斜面の理論である。世界の政策を變ず可きものは、交換及び販路の其れである」と稱せられた「販路論」（théorie des débouchés）を構成して、力强く、「外國產物の輸入は國内產物の販賣に取つて有利である。即ち、自國の勤勞、土地、資本の生產物を以つてして、初めて外國商品を購入することの出來るものであつて、從つて、自國產物は此の對外交易に於いて販路を取得するが故である」と主張したものは、實に佛人ジャン・バッチスト・セイであつた。（Traité d'économie politique, 6me éd., 1841, p. 51, 145-146.）。

而して、「自然的秩序」、「攝理的調和」に對する信仰は、フレデリック・バスチアに於いて其の最も極端なる表明を見出した。

バスチアは、英國の反穀物運動に對する熱烈なる同情に驅られて、初めて其の意見の宣傳を活潑に行ふに至つた。彼れが初めて Journal des Economistes. 誌に寄せた論稿 Sur l'influence des tarifs Français et Anglais sur l'avenir des deux peuples. (ibid., vol. ix, 1844, p. 244-271.) が、一千八百四十四年十月を以つて世に現れるや、彼れは一朝にして時代の寵兒と爲つた。彼れの所論の特徴たる樂觀的自由主義は、英國正統學派經濟學の有して居つたやうな堅牢なる基礎を有するものではなく、又、彼れの自由貿易運動は、彼のコブデン及びブライトをして成功を贏得せしめた確乎たる歴史的階級的根柢を有するものでもなかつた。彼れは只管英國の反穀法聯盟に倣つて宣傳を行ふが爲めに、一千八百四十六年二月、ボルドーに「自由貿易協會」(Association pour la liberté des échanges) を設立した。

然しながら、佛蘭西に於ける自由貿易論者の力は英吉利の其れに比して微弱であつた。ルイ・ナポレオンの即位後、一千八百五十三年十一月二十二日には、鐵、石炭等の關稅が輕減せられ、翌五十四年八月十九日には幾多の原料及び補助資料の關稅が免除せられ、其の翌五十五年には、一月六日、七月十六日、八月二十二日、同二十九日、十月十七日と相次いで自由主義的なる關稅改正が行はれ、更らに六十年にはコブデン・シュヴァリエ條約によつて、同國は英國と相互的に其の輸入關稅の減免を行つた。然しながら、保護主義は軈がて其の復活を見るに至り、一千八百七十五年後に至つて、這般の傾向顯著と爲り、佛國は遂に自由貿易政策に其の背を向けること〳〵爲つたのである。

十

略々同樣の變遷は獨逸に於いても亦、之れを認めることが出來る。

獨逸は、第十九世紀の初に至る迄、經濟思想界に君臨す可き大才を自國內に有することがなかつたが爲めに、外來の理論をして容易に此の國に於いて其の勢力を張ることを得せしめた。佛蘭西に重農學派が起るや、此の國に於いては、シュレットヴァイン (Johann August Schlettwein)、モーザー (Friedrich Karl von Moser)、マウヴィロン (Jacob Mauvillon)、シュアルツ (Theodor Schmalz)、クルーク (Leopold Krug) 等の追隨者を出した。軈がて、アダム・スミスの『國富論』が此の國に紹介せられると共に、彼れの原理は全獨逸に普及するに至つた。(『三田學會雜誌』第三十四卷第六號所載拙稿『アダム・スミスと國民主義經濟學』一〇七—一〇九頁參照)。

然るに、哲學者ヨハン・ゴットリープ・フィヒテは、スミスの唱導するが如き自然的調和論及び自由主義的政策を以つて、英國の如く强大なる中層階級を有する繁盛なる統一國家に於いてのみ唯り妥當なるものであつて、繁盛をも統一をも有することなく、又、主として農業に依存する獨逸の如き國家は、個人の安寧幸福に必要缺く可らざる經濟的安固を維持するが爲めに國家的積極的干涉の政策を要求することを主張した。斯くて、ボン氏 (Moritz Julius Bonn) の說くが如く、重農主義者の自給的自由國家は、彼れによつて、計畫的社會主義的封鎖國家に變形せしめら

れたのである。フィヒテに從へば、國家は何よりも先づ對外商業に對して全然自己を閉鎖し、而して、爾後、分離せしめられた商業團體を形成すること、恰も國家が是れ迄既に分離せしめられた法律的及び政治的團體を形成して居つたと同樣なる可きである。這般の分離にして先づ成立するならば、其の他の總べてのものは極めて容易に達成せらる可きである。（Der geschlossne Handelsstaat, 1800, S. 203.）。土地の表面の一定部分は、其の住民と共に、政治的全體を形成す可く自然によつて明確に決定せられてゐる。分離しては存立することの出來ぬ諸地帶も、結合すれば、其の住民に最高の繁榮を來さしめるのである。所謂、國家の「自然的境界」が云々せられる場合には、決して唯だ單に軍事的に掩護せられた堅牢な境界のみではなく、更らに夫れ以上に生產的獨立及び自足が考慮せられなければならぬ。（a. a. O., S. 213-214.）（前揭『國民主義經濟學』一五―一九頁、『アダム・スミスと國民主義經濟學』一〇九―一一〇頁參照）。

當時フィヒテの著は概して不評であつて、後年浪漫主義の經濟學者として其の名を輝かすに至つたアダム・ミューラーの如きも、此の時代に於いては猶ほ全然スミス學派の精神を以つてフィヒテに反對し、彼れが一千八百〇一年十二月、Neue Berlinische Monatschrift. に寄せた Über einen philosophischen Entwurf von Herrn Fichte, betitelt: Der geschlossene Handelsstaat. に於いて、フィヒテの經濟史的實證的知識の缺乏、經濟學上の文獻に就いての無識、及び狹隘なる地方的態度を激しく非難し、彼れの見解を經濟過程に對するアダム・スミスの深遂なる洞察と不利なる對照に置き、而して、特に、國家の睿智に關するフィヒテの稱讃を疑問とした。而して、ナポレオンの大陸封鎖に由る「封鎖的商業國」の部分的實現によつて生じた現實の不快な印象其の他は、此の著をして更らに不評ならしむるに役立つものがあつた。

アダム・スミスの影響は愈々獨墺に於いて顯著と爲るに至つた。一千八百十八年、普魯西に於いては、國內交易から煩瑣なる賦課、租稅及び多數の封建的障害が排除せられた。官界及び教職に在る經濟學者は新思想の洗禮を受けた。シュタイン（Freiherr Karl vom und zum Stein）及びハルデンベルグ（Fürst Karl August von Hardenberg）は實に其の嚮導者であつた。而して、一千八百二十一年の普國關稅は、愼重なる態度を以つて、スミスの學說を適用した歐洲大陸最初の關稅であつた。一千八百五十年以來、普魯西は愈々自由貿易に向つて進み、一千八百六十二年には、前記六十年の佛英條約に等しい條約を佛蘭西と協定した。同一方針に基いた協商は他の獨逸諸國及び墺太利との間に成立した。獨逸人は其の製造品の大部分を輸入し、農產物を輸出して居つた間は、英國を讃美し、經濟的自由主義を採用することが出來た。然しながら、一千八百七十九年七月十五日には、獨逸の產業主義者は、時の宰相ビスマルクをして國內產業保護の目的を以つてする關稅法を發布せしむるに足るの力を有して居つた。

十一

自由貿易の制度に關して英國と同樣の地位に在る國々が殆んど他に存しないことは極めて明かである。マンチェスター學派は終に英國以外の列强をして其の國際主義的貿易理論を信奉せしめることが出來なかつた。國際主義的貿易は國民主義的貿易に向つて進展せんとして、爰に、或る種の自給自足を企圖する諸政策は其の復活を見たので

ある。國際商業は毫も國內商業と異なることなく、又、國際的分勞の利害は個人的分勞の其れと同一種であると見、國際貿易は其の愈々自由なるに從ひ、其の利益は益々大であると做す世界主義的なる自由貿易論は、唯り、海軍力の優越を基礎とするか、若しくは、戰時に於いてすら海洋の自由を保證する國際法規が嚴然勵行せられつゝあることを前提としてのみ初めて主張せられ得るものである。海軍力の優越が總べての國々によつて享有せらるゝを得ないことは固より明かなことであり、又完全なる海洋の自由が確保せらるゝを得ないとするならば、或ひは國民的產業の獨立を目的とし、或ひは國民的富强を根據として、新生未發達の產業を國家の力によつて保護せんとするの意見が提唱せられなければならぬことは當然である。斯くて、亞米利加及び獨逸の未發達產業保護論は、國際的分勞に基礎を置く國際的相互依存の理論と戰はなければならなかつた。獨のフリードリッヒ・リストと米のヘンリィ・チャールズ・ケーリィは、英國の產業的優越に對して歷史的諸理由を指摘し、先進國の競爭者に對抗して有效なる保護を自國の產業に與ふるが爲めに關稅障壁を高うし、而して其の蔭に其の夫々の國家の潛在的資源を發達せしむるの權利を彼れ等の國々の爲めに主張した。而も、彼れ等は既に二世代の間北米合衆國に行はれて居つた政策に對して理論的是認を與へたに過ぎざるものであつた。

斯くの如き政策の一般觀念は、早く既にアレグザンダー・ハミルトンが一千七百九十一年十二月五日に米國下院に致した有名な Report on Manufactures. の中に表明せられてゐる。彼れ曰く、「唯り一國の富ばかりでなく、其の獨立及び安泰も、製造業の繁榮と關聯せしめらるゝこと頗る大なるの觀がある。あらゆる國民は、是れ等の大目的の爲めに、國民的必需品供給の諸要素の總べてを自己の內に所有することに努む可きである。是れ等のものは食、住、衣及び防備の手段を包含する」と。(Papers on Public Credit, Commerce and Finance by Alexander Hamilton, ed. by Samuel McKee, Jr., with a Foreword by Elihu Root 1934, p. 227.)。ハミルトンは、工業的なる北部諸州と農業的なる南部諸州の間には利害關係の衝突が存すると做す一般に行はれつゝある意見に對して、製造業の總體的繁榮と農業の總體的繁榮とが密接に關聯せしめられて居ると云ふことは、經驗によつてよく確立せられ、又一般に承認せられた格率であると答へる。(ibid., p. 230.)。彼れは、米國に於いて奬勵せらるゝに値する製造品を選擇するに際しては、五個の事情が特に注意せらるゝの要あるものと做してゐる。原料品を供給する其の國の力　製造業の本質が機械を以つて手の勞働に代らしむるを許すの程度、實施の難易、其の物品の供用せられ得る用途の廣狹、そが他の利益、特に國防の大利益に役立つことが是れである。(ibid., p. 249.)。

固と米國は其の製造品の供給を主として英國に仰いで居つたのであるが、革命及びナポレオン戰役時代に於いて、英國との貿易が妨げられ、同國製造品の競爭が制限せられたが爲めに、幾多の小工業は特に其の北東部に於いて、隆盛と爲つたのであるが、英國との貿易が復活すると共に、其の或る者は甚しい打擊を蒙らなければならなかつた。斯くの如き事情は、保護主義をして此の國に於いて勝利を得せしむるに與つて力があつたのである。

一千八百二十五年、米國に渡り、當時此の新興國を惱ましめて居つた政治上、經濟上の諸問題を熱心に研究し、北部諸州の高關稅の主張に熱狂的に左袒し、「ペンシルヴェニア製造業及び工業的技術振興協會」副總裁チャールズ

ズ・インガァソル（Charles Ingersoll）の示唆によつて、一千八百二十七年 Outlines of American Political Economy in a Series of Letters addressed by Frederick List to Charles J. Ingersoll. 並びに Appendix to the Outlines of American Political Economy in three additional letters to C. J. Ingersoll. を公にし、獨逸に歸つて、其の亞米利加滯在に由つて取得した觀念を母國の産業問題に適用し、而して一千八百四十一年、其の主著 Das nationale System der politischen Oekonomie. の第一卷 Der internationale Handel, die Handelspolitik und der deutsche Zollverein. を著したものがフリートリッヒ・リストであつた。

リストは、總べての國民が相結合して世界的聯合（Universal-Conföderation）を成し、永遠の平和の保證が存するならば、自由貿易の利益は主張せらるゝを得可きであるが、然も、事實、斯くの如きものは存せざるものであると說く。（Das nationale System, 1841, S. 264-265.）。近時の保護制度を喚起したものは戰爭である。農業國家を して農工國家（Agricultur-Manufactur-Staat）に推移せしむるに資する戰爭は、北米自由國の獨立戰爭の如く、一國民に對して祝福である。工業力發達の氣運に向つた國民を、再び純然たる農業狀態に投げ返す平和は其の國民に取つての呪詛であつて、戰爭よりも之れに取つて遙かに有害なる可きであると彼れは叫ぶ。（a. a. O., S. 266-267.）。

リストは、社會の眞の經濟的職能を以つて、啻だに財貨を生産するに止らず、爾後の財貨生産力を創造するに在るものと做し、保護の手段に依つて國家は這般の教育的目的を達成し、斯くて其の國民を訓練して産業上の效果を大ならしむ可きものであると主張し、「製造力（Manufacturkraft）と個人的、社會的及び政治的國民生産力」とを論じ、而して、純然たる農業國に對する工商國家のあらゆる點に於ける優越を說くに於いて彼れは甚だ雄辯であつた。（a. a. O., S. 284-300.）。彼れは發生期に於ける工業資本主義の代表者であつた。彼れはアダム・スミス及びリカードオと等しく工業主義に立脚しながらも、彼れ等が英國の先進性によつて自由貿易論者たらしめられたに反し、彼れは獨逸の後進性によつて經濟的國民主義者たらしめられたのである。彼れは「私が若し英國人であつたならば、私は必ず自由貿易論者であつたであらう」と獨語したと傳へられてゐる。（Margarett E. Hirst, Life of Frederick List and Selections from His Writings, 1909, p. 134.）。

曩きに其の名を擧げたインガァソルと等しく、フリートリッヒ・リストの米國滯在時代の同志であり、ペンシルヴェーニアの保護關稅運動の儕將であつたマシュー・ケーリィの子に有力なヘンリィ・チャールズ・ケーリィが現れた。彼れは宇宙を以つて調和的全一體と觀るの點に於いてアダム・スミスへの復歸を表示しながらも、自國の國情に由つて保護關稅論の主張に赴いたのである。彼れに從へば、人間は總べての他の動物と共通に、食ひ、飲み、而して眠ることを要求するものであるが、而も、彼れの最大なる必要は其の仲間の人間との聯合である。（Principles of Social Science, ed. 1877, vol. i, p. 41.）。聯合するが爲めには、人々は互に相接近して直近に存しなければならぬ。生産者及び消費者を、又、相互の生産物を必要とする生産者の種々なる集團を、寄せ集めることは接近を助成するものである。保護は製造業に對して國內市場を創設するに由つて這般の成果を擧げ、斯くて是れ等のものが使用しなければならぬ原産物の泉源、及び其の産出高を消費す可き人々に接近して、工場及び其の所在地を設定するに資す

るものである。ケーリィは trade と commerce とを區別し、而して、彼れの所謂トレードの不利を說く。總べての(all)人々は、相互に思想及び勤務を交換するが爲めに、相互に(with)聯合し、結合し、斯くて又、「カマース」を維持するに至らしめられる。或る(some)人々は他の人々の爲めに(for)交換を遂行し、斯くて又、「トレード」を維持せんことを求める。(ibid., vol. 1, p. 210.)。カマースは特異性の發達を促進するに由つて、人間の能力のあらゆる種類に對して使用の途を供する。トレードは、這般の發達を妨げ、仕事の範圍を制限し、全住民をして、大地を抓き集めることか、商品の輸送か、若しくは交換の業務かに從事するの已むなきに至らしめる。而して、社會の運動に對する其の支配が愈々完全であるならば、生産せられる諸物の數量は愈々小である。(ibid., vol. II, pp. 241-242.)。ケーリィは尙ほ其の外に、保護貿易政策が輸送費を節約し、又、交換の機構を縮少すると做すが如き他の諸論據にも依據する所があつた。彼れは又、穀物に次ぐ米國の重要物産たる棉花を例として、農産物の輸出が地力を消耗せしめ、國家を微弱ならしめることを主張した。栽培業者が年々歳々與ふる棉花の高は益々增加して其の受ける貨幣の高は愈々減少する。(ibid., p. 199.)。八十年以前には、平年、二十五乃至三十ブッシェルの小麥を收穫した紐育州は、今は僅かに十四ブッシェルを收穫するに過ぎない。煙草は、ヴァーヂニア及びケンタッキィに於いて、土地が全然消耗せられ拋棄せられるに至る迄産出せられた。而して又、「吾人は、全棉花産出地方を通じて、極めて短小の期間内に仕遂げられた世界に類例の無い消耗の光景に遭遇するのである」。(ibid., pp. 214-215.)。ケーリィの所論は「内國市場說」から進んで「多種生産說」の域に到達せるものであつて、玆に保護政策は永久的性質を有するものたらんとしたのである。

十二

斯くの如き間に於いて、自由貿易論の鄕土である英國に於いては、舊い經濟學の使命は一千八百四十六年の穀法廢止と共に一先づ果された。自由貿易論は、此の國に於いてすら、幾分の制限を必要とするに至つた。蘇蘭から加奈太に移住した經濟學者ジ■ン・レーは、夙に、其の一千八百三十四年の著 Statement of some New Principles on the subject of Political Economy. に於いて、諸社會間に於ける有用品の交換の遮斷は、材料を奪ふによつて蓄積を抑止するものではあるが、而も、發明的能力を皷舞して新たなる諸材料及び是れ等のものを用具(instruments)——レーは此の語を、人が其の將來の欲望を滿すの目的を以つて、物質的物件の形態又は其の諸部分の排列に於いて行ふ改變の總べてに適用する)に形成する新たなる手段を發見せしめると說いて居つた。(ibid., pp. 315-316.)。レーの書は、半ばは共通なる亞米利加の環境に由つて後年のケーリィの所論を豫示するものがあり、又リストの意見を暗示するものがあつたのであるが、(『三田學會雜誌』第二十九卷第十二號所載拙稿『ジ■ン・レー著、經濟學の主題に關する一定新原理の叙述』一四〇、一四三頁參照)。此の書を稱揚することの大であつたジ■ン・スチュアート・ミルは、其の一千八百四十八年の大著 Principles of Political Economy. に於いて、自國産業保護說に就いて論じ、猶ほ自由貿易を一般原理と認めながらも、是れに對して一の例外を擧示するに至つた。即ち、本來、其の國の事情に完全に適合する外國産業を自國に移植することを豫期して、保護關稅が、特に若い新進國に於いて一時的に賦課

せられる場合が是れである。(ibid., vol. ii, p. 487.)。

次いでウィリアム・スタンリィ・ジェヴォンズは、其の一千八百六十五年の著 The Coal Question. に於いて、穀法の廢止は、英國人を穀物から解放して、石炭に依存せしめたと做し、彼れ等が直接石炭と關係のある產業に親しむことが愈々大であれば、人口增加の割合は益々急速且つ不斷であると論じ、同國產業の主要なる部門が幾何級數に於いて進歩する限りは、其の石炭の消費が等しく幾何級數に於いて增加しなければならぬことが明かであると說き、當時の英國に於ける石炭消費の增加率を調査し、英國が長く其の現在の消費量增加の割合を持續し得ないことを述べ、而して、同國は現在に於ける進歩の程度を長く持續することを得ざる旨を論結し、無制限なる自由貿易が其の炭田の急速なる涸渴を來さしめつゝあることを危惧したのである。(『三田學會雜誌』第三十三卷第四號所載拙稿、『ウィリアム・スタンリィ・ジェヴォンズ著、石炭問題』參照)。

是れより稍や後れて、劍橋のヘンリィ・シヂウィックは、其の一千八百八十三年の著 Principles of Political Economy. に於いて、國民的生產の進歩が、自利的動機によつて、力强く且つ持續的に促進せらるゝことを認めると共に、自然的自由の制度に對する重要なる一般的制限と其の樂觀的結論の許されない特殊の場合を明確に認識するの必要を說いた。(ibid., p. 407.)。而して、彼れは、一定國民中に於ける一階級が、外國貿易を通じて、或る一定種の貨物をより低廉に取得し得る際には、其の國民全體は、彼れ等が斯くの如く之れを取得するに由つて利する所がなければならぬと做すの推定を以つて、這般の變化によつて仕事を奪はれた其の國民の一部が、斯くの如き變化の起る以前に於いて彼れ等の生產しつゝあつた貨物のより低廉なる外國よりの供給から生ずる利得よりも全體に於いて大なる效用の喪失なくして、彼れ等自身の國內に於いて使用せらるゝを得ない場合のあり得ることを看過せるものであると做した。(ibid., p. 495.)。

シヂウィックの『經濟原論』は、洵に、彼れの社會問題に對する關心の產物であつたのであるが、事實、英國に於いては、第十九世紀の末期に至り、特に社會的不正に對する認識增加し、勞働組合組織は發達し、勞働階級は次第に其の地位を鞏固ならしめた。彼れ等は初め自由貿易が其の生活費を低下せしめ　且つ、自國の工業を隆盛ならしめて、其の賃銀を昂騰せしめ、失業の虞れを減少せしむるものとして、之れを歡迎するの傾向があつた。然るに一千八百七十五年の頃に始まる物價低下期に於ける產業不振は保護主義をして擡頭せしめた。ジョーゼッフ・チェンバレンは第三次ソールスベリィ內閣の植民相として帝國主義的政策を强行し、漸くにして其の優越を脅かされやうとしてゐる英國の產業を外國の競爭から保護せんことを期した。彼れは純乎たるマンチェスター主義を拋棄して、新重商主義に向つて進んだ。彼れは、英國の社會的進歩を以つて帝國の繁榮に依存するものと觀、而して這般の繁榮は又、自給自足を目差す帝國內に於ける貿易の發達に依存するものであると主張した。彼れは英本國と其の植民地の間に一種の關稅同盟を締結して、大英帝國の組織を强化し、自由貿易主義を拋棄して、植民地よりの輸入品に對して特惠關稅を賦課せんことを企圖した。チェンバレンの關稅政策は其の學界に於ける主たる表明者を、ウィリアム・ジェームズ・ラッシュリィに於いて看出す。

然しながら、保護主義は、好況時代に於いては、其の力を伸張することが出來なかつた。而して、大戰以前に於いては、世界は大體に於いて經濟的國際主義に向つて進みつゝあるの觀があつた。然るに、第一次歐洲大戰は國民主義的感情を熾烈ならしめ、國民的自給主義、產業的國民主義を有力ならしめた。優越なる海軍力を以つてすれば、其の敵國を封鎖して其の人民を飢餓に瀕せしめることが出來るが、而も猶ほ潛水艦及び航空機戰術の脅威に由つて自國必要物資の供給を安全に確保することは出來ぬ。

戰爭直後に於いては、國際主義が云々せられることが多かつたのであるが、而も民族主義に立脚せる平和條約は幾多の舊帝國を分解せしめ、更らに國民主義的精神を一層熾烈ならしむるの基礎を置いた。戰時に於いて、輸入の杜絕に由つて其の發達を見た產業は貿易の復活と共に危機に當面した。而して、其の後に起つた永續的不況、世界的恐慌は愈々經濟的合理主義をして經濟的國民主義に變ぜしむるに與つて力があつた。國內產業に於ける史上未曾有の大失業群の輩出は、國民をして、之れと競爭す可き外國製品の流入防遏の必要を痛感せしめ、國內產業の國家的保護、並びに國產の市場として又原料供給地としての植民地開發が叫ばれた。

爲替の不均衡と通貨の價値下落とは、諸國民をして再び輸出を奬勵し、輸入を阻止せんとする重商主義的政策を採用するに至らしめた。曾つて自由主義華かなりし時代に於いて、「最も不條理なる形態に於ける重商主義の好例」と看做された第十八世紀初頭の經濟書の如きは、却つて、現代經濟政策の綱領を表示しつゝあるの感を吾人に與へる。戰爭に對する準備は、列强の政治家をして一層國民的自給主義若しくは經濟的國民主義を强調せしめ、而して、其の或る者は新たなる民族主義を提唱して、種族的に純粹なる國民をして精神的並びに經濟的自足を目標とする社會體制に適合せしめんとするに銳意である。斯くて、經濟理論は政治的若しくは倫理的目的に對する從屬を大ならしめて、中世的若しくは古代的理論への接近を大ならしめてゐる。現代政治家が其の國民に向つて說く所には、屢屢、曩きに引用した『君主の統治』の著者の口吻に類するものがある。